

孟浩然「臨洞庭上張丞相」詩——從來の解釋について——

三 枝 秀 子

一、はじめに

孟浩然の「臨洞庭上張丞相」詩は彼の代表作の一つとされ、また、岳陽樓を詠じた詩として杜甫の「登岳陽樓」に並ぶ作品と言われている。^①

日本におけるこの詩に關するこれまでの研究は、黒川洋一氏の論考「孟浩然『望洞庭湖、贈張丞相』詩について」に代表されるように、詩の内容や表現の研究よりも、詩題に見える「張丞相」が一體誰なのかについて説明するものである。^②

そして、前野直彬・石川忠久兩氏が『漢詩の解釋と鑑賞事典』にて、「前半四句の自然描寫が、スケールが大きくダイナミックであればあるほど、今の自分が情けないのだ。才を抱きつつ世にいられない悔しさが胸をつく。しかし、後半の「情」は自分の不満を述べるのにややむき出しの感は否めず、この詩の味わいをそこねているようだ^③」と、この詩に關して述べる。前野・石川兩氏によると、この詩が評價されているのは、前半四句で、後半四句は前半ほど評價されていないように受けとめられる。^④

前野・石川兩氏の言及のように、孟浩然のこの「臨洞庭上張丞相」詩の評価されるべき所は前半の四句だけなのだろうか。また、孟浩然の「むき出し」の感情は、評價に値しないということなのだろうか。何故に孟浩然の代表作の一つと言われるのだろうか。このような疑問を抱き、この「臨洞庭上張丞相」詩について検討することにした。その研究方法として、まずはこの詩に關する先行研究を概観し、この詩がこれまでどのように理解されてきたのかを明らかにしたい。そしてそれをふまえこの詩を理解する上での問題點を指摘していきたい。

先行研究を概観すると、冒頭に示したようにこの詩の「張丞相」は誰かという問題が存在する。さらにこの他に、この詩を理解する上での問題があることが明らかにになった。それでは以下に先行研究を見ていくことにしたい。

二、「臨洞庭上張丞相」詩の全文と譯文

まず、「臨洞庭上張丞相」詩の全文をここに擧げたい。従來の解釋を紹介する一環として、田部井文雄氏の『唐詩三百首詳解』より書き下し文および譯を示す。なお、書き下し文の下の括弧内には底本として使用した佟培基氏の『孟浩然詩集箋注』に載る原文から、文字の異同がある場合それを示した。⁽³⁾

八月湖水平　　八月湖水平らかに

涵虛混太清　　虛を涵ひたして太清たいせいに混まず　　（「涵」を「含」に作る）

氣蒸雲夢澤　　氣は蒸す雲夢の澤

波撼岳陽城
〔撼〕を〔動〕に作る

欲濟無舟楫
濟らんと欲するに舟楫無し

端居恥聖明
端居して聖明に恥づ

坐觀垂釣者
坐ろに釣を垂るる者を觀ては

徒有羨魚情
徒らに魚を羨む情有り
〔徒〕を〔空〕に作る

【通釋】

洞庭湖を前にして（その感慨を述べ）張丞相に奉る（詩）

（首聯）（陰曆、中秋の）八月、（洞庭）湖の水は（見渡す限り）平らかで、大空を水にひたし、水は空とひとつになっ

て（見えて）いる。

（頷聯）（遙かに）雲夢の澤あたりには、水蒸氣が立ちこめて、（湖水の）波は、岳陽の町をゆり動かしている（かと思われる）。

（頸聯）（湖水を）渡ろうとしても、（今は）舟がない。何もしないで座ってばかりいて、天子の聖明の徳に對し、恥じ入るばかりである。

（尾聯）釣糸を垂れている人を何とはなしにみて、ただ、（空しい望みではあるが）魚が欲しいと（釣り人を）羨む氣持ち（すなわち、仕官すべく行動したい氣持ち）がわいてくる。

田部井氏によるとこの詩は、洞庭湖を前にしてその感慨を述べ張丞相に奉った詩ということである。また、この詩の

題の「張丞相」は、一説に、張九齡（六七三〜七四〇）を指すと述べ、張九齡はこのとき、尙省右丞相から轉じて荊州刺史となり、孟浩然は招かれて、その従事となっていたとのことである。氏はもう一説として、「張丞相」は張説（六七〇〜七三〇）を指す説もあると述べる。張九齡と張説の兩者ともに前後して丞相の地位に就いており、前者であれば作者晩年の作、後者であれば四十歳前後の作ということになるそうである。

冒頭にて黒川氏の論考を取り上げ既述したが、「張丞相」が誰であるか。これがこれまで問題の一つとされてきた。それについて次に取り上げたい。

三、詩題について——「張丞相」は張説かそれとも張九齡か——

詩題にある「張丞相」を「張九齡」とするか、「張説」とするかの一説があることは、先の黒川氏、及び田部井氏により明らかにしている。

冒頭にて示した黒川氏の論考「孟浩然『望洞庭湖、贈張丞相』詩について」において、氏は蕭繼宗氏及び鈴木修次氏の「張説説」に對して疑問を提示し、自身は「張九齡説」を主張する。黒川氏は詩の制作年代を晩年（四十九歳）と推定した上でこの詩の主題について言及する。氏はこの詩の主題を仕官を訴えたものではなく、「世の中に貢獻しえないままに年をとってしまったおのれの無力を恥ずるとともに、仕官の心を抱きながらも、今さら世に出るつもりもない心境を、湖水を前にして吐露したことばである」という。

黒川氏の論考は、この詩がいつ、だれに對して作られたのかを明らかにし、その主題を考察するために書かれたものである。よって「張丞相」を張九齡とするとこの詩の制作年代を孟浩然の晩年とすることができる。さらに氏が考える

この詩の主題とも辻褄が合うことになる。

田口暢穂氏は、一九八〇年に「孟浩然と『張丞相』」にて、黒川氏の説に賛同し、「張九齡説」をとるとしている。⁽⁸⁾その理由は以下の通りである。

・張九齡との交遊を窺わせる資料はあるが、張説とのものはないこと。

・張説が孟浩然との交遊をなしたとするならば、開元二年（七一四）から開元六年（七一八）ごろの間のことだろう。張説と三十に満たぬ無位無官の浩然が知り合う可能性があったとは、いっそう考えにくいと言わざるを得まい。

・もし三十前の孟浩然が世にでるため張説にコネクションをつけるような行動に出ていたとしたら、もう少し違った傳記・逸話が伝えられてもよい。

この理由にて氏は「張丞相」を張九齡とし、孟浩然が張九齡の辟に應じたのが開元二十五年（七三七）の冬であるとしている。そしてこの詩の「八月湖水平らかに」の句からみて、この詩の制作時期を九齡の辟に應ずる前、開元二十五年（七三七）秋の作と限定してよいとしている。（孟浩然四十九歳）

田口氏は孟浩然の足跡等の資料を丹念に調べること、「張丞相」を「張九齡」とし、さらにこの詩の制作時期についても言及されている。この詩に関する数少ない貴重な先行研究である。

「張説説」および「張九齡説」の二説の他に、もう一つ説がある。田口氏は、松浦友久氏の『校注唐詩解釋辭典』（一九八七年）にて孟浩然のこの詩を擔當し、「諸説の異同」にて、二説の他にさらにもう一つの第三説めとして張説と張九齡の兩者のいずれか分らないとする説を取り上げ記している。⁽⁹⁾

日本におけるこの詩に関する研究書等によると、一九六二年出版の『唐詩選』にて前野直彬氏が「張丞相」を「張九

齡」と語注され、それ以降、およそ五十年後、二〇一五年出版の川合康三氏の『新編中國名詩選』に至っても「張丞相」は「張説あるいは張九齡」と記されており、問題は解決されていないことがわかる。¹⁰⁾

以上、日本における詩題の「張丞相」に關する解釋を概観した。中國および臺灣における「張丞相」に關する解釋については、注9に示した田口氏の調査をもとにすると、一九六五年、陳貽焮氏が「孟浩然事跡考辨」にて「張九齡説」を、そして一九六九年に蕭繼宗氏が『孟浩然詩説』にて「張説説」をとっていることがわかる。その後の研究の動向を、注9に示した田口氏の調査に加える形にて論者が行ったところ、一九八〇年、九〇年代は「張九齡説」をとるものが多く出るが、二〇〇〇年に入り、「張説説」をとるものが出て來ている。このような状況から鑑みると、中國および臺灣においても日本と同じく「張丞相」は「張九齡」かそれとも「張説」か問題は解決されていないことがわかる。

以上のように、詩題の「張丞相」に纏わる問題は解決されていない状態にある。その上詩題にはもう一つの問題も存在する。それは、詩題に「張丞相」と付されず、ただ「臨洞庭」としたり、または「岳陽樓」とするものがあることである。詩題を「臨洞庭」または「岳陽樓」とするならば、「張丞相」についての検討は不要であるともいうことができ。だが、詩中に詠まれる「垂釣者」を「張丞相」つまり張九齡と解するものもあるため、看過することもできないと考える。だが、現在の所、新たな資料なども無く、先行研究以上の検討を加えることができない状況にある。

以上、ここでは題に關する問題について確認した。次に詩に詠まれる語句に關して、問題がないかどうか見ていくことにする。

四、詩の語句に纏わる問題

ここでは、首聯から尾聯までの各聯毎に、日本における各研究者が施した語注をまとめて提示したい。¹²⁾

(一) 首聯「八月湖水平、涵虛混太清」

「八月」は田口氏によると「陰曆八月は秋のさなかで、河川の増水期にあたる」とある。「涵虛」は前野氏に「虚空を水中にひたす。はるかにひろがる湖水のはてが空につらなり、水と空の境界が明らかには見さだめがたいありさまの形容」とある。他の研究者も同じ解釋が多い。「太清」は前野氏に「空のこと。もとは道教で天上を三層に分けた中の一つに名づけた言葉」とある。他の研究者もほぼ同じ解釋である。

(二) 頷聯「氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城」

「氣蒸」は前野氏が「雲・霧・霞などが立ちのぼること」とある。他の研究者も日本語の表現の違いほどの差の範囲内にてほぼ同じ解釋である。「雲夢澤」は、前野氏が「洞庭湖の北、湖北省南部にあった大きな沼澤地。しだいに干あがって陸地となったが、いまでも多くの湖沼が残っている」と語注を施している。他の研究者も同じ解釋である。「撼」は、語注を施す者が少ない中、目加田氏が「ゆりうごかす」と語注する。また次の二氏は文字の異同について言及する。まず、田口氏は「揺り動かす。「動」なら、うごかす」と、次の田部井氏は「ゆすり動かす。動搖させる。一本「動」に作る」と述べる。「岳陽城」は、前野氏が「いまの湖北省岳陽の町。洞庭湖の東北端、揚子江へつらなる水路の口に

ある」とし、他の研究者も前野氏と同様に地名に關する説明をしている。

(三) 頸聯「欲濟無舟楫、端居恥聖明」

「濟」は、前野氏が「湖水を渡る。一つの目的に到達することにたとえる。ここでは官職につくこと」と語注する。「舟楫」は研究者により理解が異なる。まず、前野氏は「舟。目的に到達するための手段にたとえる。ここでは官職につくための手づる」と、松枝氏も同様に「自分の才能をひきたててくれる人をたとえる」と語注する。前野氏は石川氏との共著にて「欲濟無舟楫」の句を「湖面を渡ることになぞらえて、官職につくにもつてがないことを暗示する。『書經』說命編に「もし巨川を濟らば、汝を用ゐて舟楫となさん」とあるのに基づく」と典故を示しつつ語注する。以上は、「舟楫」を政治に参加するための手づる、つまり自分を引き立ててくれる人とする理解である。この理解に加え、川合氏は引き立ててくれる人物を具體的に言及し、「舟楫」は「張丞相を指すとともに自分が官界入る手立てとも掛ける」と述べる。一方、これらとは異なる解として、目加田氏は、「ここは世に出るにしても何ら經綸の才のないこと」と、つまり自分に才能の無いことをいうとする。以上のように「舟楫」には、自分を引き立ててくれる人、つまり他者か、それとも自分に才能の無いこと、つまり自分かという見解に分かれている。田口氏は「世に出たいと思ってもその才・方途などがないこと」の兩者とする。田部井氏も「舟とかじ。また、舟。ここでは、仕官の望みをとげる手段。手づる。また、一説に、世に出る才能・經綸。『書經、說命上』に「若濟巨川、用汝作舟楫」とある」という様にこの二説の一方をとることを明らかにしていない。以上が「舟楫」に纏わる解釋である。

「端居」は、前野氏が「平凡な生活」と、目加田氏が「じっと坐している」と、前野・石川兩氏が「閑居。何もしない生活」と語注する。他の研究者の理解もここに挙げたいずれかの範圍に含まれる。いずれにしても官界とは異なる生

活という理解である。

「恥聖明」については、前野氏が「聖明」を「天子の明らかな徳」と語注し、目加田氏は「聖天子の治めている御代にありながら恥ずかしい」と「恥」にまで及ぶ解釋をしている。他の研究者もおおよそ同様の解釋であるが、川合氏はそれに加えて「自分を登用しない天子の不明に不満をこめる」と語注を施している。

(四) 尾聯「坐觀垂釣者、徒有羨魚情」

「坐觀」は、後述の第五章にて取り上げたい。よってここでは記さないこととする。「垂釣者」は、前野氏が「釣絲を垂れている人」と語注する。續いて氏は「この一句は、『徒憐垂釣叟（徒らに憐れむ釣り垂るるの叟）』となつてゐる本もある」と述べている。他の研究者もほぼ同様の理解であるが、川合氏は語注にて、「あるいは釣りをする太公望呂尙に自分をたとえ」と記している。川合氏によると「垂釣者」は太公望呂尙であり、またさらにそれは自分自身、つまり孟浩然自身として解すことができるということである。川合氏はこの様に語注では「あるいは太公望」と擧げているが、氏のこの句の譯は「何もせずただ釣り人を見物し」とあり、前野氏の「釣絲を垂れている人」と解するのと同じである。以上、「垂釣者」については、川合氏の「あるいは太公望」の語注以外、他の解は確認できない。

續いて「羨魚情」だが、前野氏は、

魚をほしがる氣持。『漢書』董仲舒傳に、「淵に臨んで魚を羨むは、退いて網を結ぶに如かず」とあるのにもとづく。希望ばかりしているよりは、その希望がかなえられるように、自分で行動すべきだという教え。ここでは官職を求める氣持をいう。

と解する。他の研究者の理解もこの前野氏の語注の範囲にある。

以上、首聯から尾聯までの語句に施された解釋を示した。語句についての理解は、各研究者とも首聯から尾聯までの解釋上の細かい表現の差はあるものの、「舟楫」と川合氏の「垂釣者」の語注に擧げられた理解を除くとほぼ同様の意であるということが出来る。ここに示したのは日本における研究の成果である。これを中國の各研究者のものと比較すると、まず、「舟楫」は中國においては「推擧してくれる者がいない」、という理解―他者の引き立て―とするものが主流であつた。⁽¹⁴⁾そして「垂釣者」に關する理解は日本のものと異なることが認められた。日本においては「垂釣者」は「釣絲を垂れている人」とするものが多く、川合氏の語注にあつた「太公望」以外、特別な意味は付けられていない。これに對し中國においては、「垂釣者」を「爲政者」、「役人」、「張九齡」と解しているものが見られた。この理解の内、「垂釣者」を「張九齡」という具體的な人物とした場合、その張九齡に仕官を求める詩としてこの詩全體の主題を捉えていると認めることができる。⁽¹⁵⁾このことから、「垂釣者」の理解は詩の理解にも關係しているということが出来る。よつてこの「垂釣者」について、今後詳細な検討が求められる。

では、次に「坐觀」について取り上げたい。

五、「坐」について

(一)「坐」について…問題の所在

「坐觀」の「坐」は、この詩およびその他の作品の中においても「そぞろ」と訓じることが慣例となっている。それがこの詩の理解の妨げになっていると考へている。前章にて取り上げたそれぞれの語句とは異なる問題であるため、ここに「坐觀」の「坐」を専ら取り上げることにした。

日本ではいつから「坐」を「そぞろに」と理解するようになったのだろうか。それについては向島成美氏の論考『「坐」の訓について』に詳細な研究がなされている。氏が検討した「坐」は、杜牧「山行」詩の一句「停車坐愛楓林晚（車を停めて坐ろに愛す楓林の晩）」の「坐」についてである。¹⁶⁾氏は日本において「坐」を「そぞろ」と訓讀しはじめたのは、鮑照の「蕪城賦」の「驚沙坐飛」に對する『文選』の訓の影響が考えられるという。また、杜牧「山行」詩の「坐」について、日本での理解と中國のものとはその解釋に違いが見えるという。日本では「坐」を「そぞろに」と訓讀し、「自然と」の意としているが、中國では「坐」を「因・爲」つまり「…による…のため」という行爲や動作の原因を表す言葉として解釋していると述べる。そして日本と中國のいずれの意味に解すべきかについてはなかなか判断を下し難く、今後さらに検討を要する問題であると述べている。

向島氏のいうように日本では「坐」を「そぞろに」と訓ずることが多い。孟浩然の「坐觀垂釣者」の「坐」もその慣例の一つである可能性があると考ええる。よって、次に「坐」についての理解を、日本と中國のそれぞれを示し、解釋の違いを明らかにしたい。

(二) 日本における解釋

以下に孟浩然「臨洞庭上張丞相」詩の「坐」の訓讀および「坐」の詠まれる尾聯「坐觀垂釣者、徒有羨魚情」の譯を擧げる。比較のしやすさを考慮し、語注や語釋が施されているものはそれも列記する。¹⁷⁾「坐」の意に該當するものには「波線」を、「徒」の意には「傍線」を、「有」には「、點」をそれぞれ違いを明らかにするために付した。）

・「坐ろ」と訓讀

・ふと湖のふちに釣糸を垂れている人の姿を見ては、私の心にも、むなしい望みではあるが、魚を―仕官を求めようとする氣持がおこってくる。

・坐觀：意識してではなく、ただ何となくながめること。

b 目加田氏『唐詩三百首』（一九七五年）

・「坐して」と訓讀。

・手を拱いて釣りする人を見ていると 私にも魚を羨む心が起ころるのです^⑧

c 松枝氏『中國名詩選』（一九八四年）

・「坐ろ」と訓讀

・釣糸を垂れている人をぼんやり眺めているうちに、不肖わたしも魚をとりたいたいという氣持が湧いてくるのだ。

d 田口氏『校注唐詩解釋辭典』（松浦友久編・一九八七年）

・「坐ろに」と訓讀

・見るともなく釣糸を垂れている人を見ては、むなしいことではあるが、自分も魚がとりたいたいという思いがわいてくるのである。

・坐觀：何となく見る

e 田部井氏『唐詩三百首詳解』（一九八八年）

・「坐まろに」と訓讀

・釣り糸を垂れている人を何とはなしにみて、ただ、（空しい望みではあるが）魚が欲しいと（釣り人を）羨む気持ち（すなわち、仕官すべく行動したい気持ち）がわいてくる。

・坐觀…何とはなしにみる。坐は、自然に、無意識に、の意。一説に、「坐まして」とよんで、手てをこまねいての意とする。また、ために。

f 川合氏『新編中國名詩選』（二〇一五年）

・「坐まながらにして」と訓讀

・何もせずただ釣り人を見物し、魚がほしいと空しく羨望する。

・「坐」は何もせず空しく。「徒」もいたずらに、空しく。二句はいわゆる「互文」の関係にあり、意味が重なり合う。

a から f までに挙げた「坐」を詳細に見ると、その理解は大きく二つに分けることができる。一つは「そぞろ」と訓讀するもの、もう一つは「坐して、いながら」である。

まず、「坐」を「そぞろ」と訓讀する場合であるが、a 前野氏、c 松枝氏、d 田口氏、e 田部井氏のように「ふと」

「ぼんやり」「見るともなく」「何とはなしに」と譯している。これは先に示した向島氏の「坐」に關する見解―「自然」と―と一致する。これらの理解「ぼんやり」や「何とはなしに」等は意識しているのではなく、意識せずにいる状態

と理解することができる。

このような「坐」の理解は、洞庭湖の自然を詠じる「隱遁詩人孟浩然」のイメージと重なり合い詩の理解の一助になっていると考えられる。官職を求めることなど考えもしていなかった孟浩然が、釣りをしている人を見ることにより官職を求める情が湧き上がってしまったと理解することができる。

次に、「坐」を「坐して、いながら」と訓讀する場合を見よう。まず、bの目加田氏は「坐」を「手を拱いて」と、つまり、何もしないで傍觀するという意として解している。これは先の「ぼんやり」や「何とはなしに」等とは異なった解釋である。この解釋によると、釣りをする（＝官職を求める）事に手をださずにいる私であるが、魚を釣る人を見ると自分にも魚を羨む心が起こるといふ理解である。

また、次のfの川合氏であるが、氏は「坐」を「いながら」と訓じ、その意味を「徒」と同じく「空しく」とし、さらにこの文は互文であると注をしている。氏はつまり、空しく魚を釣る人を見て、空しく魚を求めるとして解しているということになる。

つまり、目加田氏と川合氏の「坐して、いながら」と訓じている場合、そこには「ぼんやり」や「なんとなしに」という無意識の感は無いと解していると論者には見受けられる。

さらに、川合氏の互文であるという指摘は日本においては珍しいものである。しかし次に挙げるように、中國における注釋書においてはよく見る解釋である。

(三) 中國における解釋

中國では、「坐」の解釋は日本のものと異なり、「坐」を「徒」や「空」と同じく「むだに」といふ意に解すものが見

える。例えば、趙桂藩氏の『孟浩然集注』には、「坐觀：空觀，徒觀」とあり張相の『詩詞曲語辭匯釋』四の解釋を見るようにとある。そして例として謝朓の「和王主簿季哲怨情」詩の「徒使春帶除，坐惜紅顏變（徒に春帶をして除からしめ、坐ろに紅粧の變ずるを惜しむ）」の句を示した後に「徒」と「坐」は互文同義である」とし、さらに江淹詩の例も挙げ、そして最後に、「この句（孟浩然「臨洞庭上張丞相」の「坐觀」の「坐」と下の句の「徒有」の「徒」も互文同義である）」という。

また、「坐」を「徒然」「白白」と解するものもある。例えば、楊軍氏の『新譯孟浩然詩集』には「坐觀二句：意謂看到臨湖垂釣の人、徒然羨慕他們得魚。比喻自己空有追求功名的願望而無法實現（坐見の二句は、湖で釣り糸を垂れる人を見ては、彼らが魚を得るのをむだに羨んでいることをいう。自分自身には功名を追求したい願望がむだにもあるのだがそれを實現する方法がないことを喩えている）」とある。また、劉逸生・李小松兩氏の『孟浩然韋應物詩選』には「坐觀」二句：我坐在一旁觀看釣魚的人，只好白白羨慕別人釣到大魚罷了（坐觀の二句は、私は釣りをする人のそばに座り釣りをしている人を見て、他人が大きな魚を釣り上げるのをむだにも羨むしかない）」とある。

以上、中國において「坐」は「徒然」、「白白」（日本語の「むだである」という意味として理解されていることがわかる。とするとこの「坐觀垂釣者、徒有羨魚情」の句は、「むだにも釣りをしている人を見て官職を求めている」という意に理解し得るといことになる。この理解は、日本の従來の「そぞろ」に「なんとなく」釣りをしている人を見ているというのとは異なっている。

以上、日本および中國における「坐」の理解を比較した。先の向島氏の杜牧詩の「坐」のように、孟浩然詩のこの「坐」においても、日本と中國において明らかな違いを見ることができた。その違いについてまとめると、日本では「坐」を日本語としての「そぞろ」つまり「自然と」や「なんとなく」という「無意識」や「無作為」という意味とし

て理解している。一方、中國では「坐」を「徒然」や「白白」、つまり「むだである」という意味に解している。

「むだである」と「自然に・なんとなく」とではニュアンスの違いがあるように感じる。「むだである」とは、その對象を認識し、その對象を必要か、必要ではないかどうか判断し、そしてむだだとしている。つまり對象を意識していることになる。一方の「自然と・なんとなく」は、對象に對して意識や作爲的なことは無いと言いうことができるのではないか。そしてこの違いはこの句の理解にも違いを及ぼしているとも考えられる。今後、この「坐」の詳細な調査を行い、さらにこの句について再考する必要がある。

六、前半二句と後半二句の關連性について

日本においてこの詩は、前半に比べて後半があまり評價されていない。冒頭にて舉げた前野・石川兩氏の『漢詩の解釋と鑑賞事典』に書かれた一節をもう一度ここに舉げたい。

後半四句は「景」より觸發された「情」を述べる。この雄大な洞庭の大自然を前にして、舟も楫も無い。そして聖明に恥じつつ端居している作者は、孤獨で不遇なのである。前半四句の自然描寫が、スケールが大きくダイナミックであればあるほど、今の自分が情けないのだ。才を抱きつつ世にいられない悔しさが胸をつく。しかし、後半の「情」は自分の不満を述べるのにややむき出しの感は否めず、この詩の味わいをそこねているようだ。

また、佐藤保氏も『漢詩のイメージ』にて「(後半四句は)「張丞相」にそれとなく仕官の手引きを頼んでいるもの。前半のスケールの大きなうたいぶりに比べていかにもみみっちい」と後半を評價していない。

後半部分が評價されないのは、前半部にて表現される壯大な自然描寫に比して、後半は自分を取り立てて欲しいとい

う願いが表現されているため、「隱遁者孟浩然」らしからぬ「むき出しの感」や、「みみっちさ」があり、詩の味わいが損ねられるという理由からであろう。一方、川合氏は、

雄大な洞庭湖を描く前半から、洞庭湖―渡りたい―舟がないと語り繼いで援引を求める後半につながる。山水を描くに長じた無官の詩人とはいえ、孟浩然是終始して官を求め続けたのであって、その両面がこの詩には集約されている。⁽²⁶⁾

という。氏が言う「両面がこの詩には集約されている」とは、孟浩然の山水詩人として無官の面と、士大夫として仕官を求める面、この両面が一つの詩に表現されているということである。論者も川合氏に與したい。

前半と後半の關係について、中國ではどのように理解されているだろうか。

劉寧氏は『王維孟浩然詩選評』において、清の屈復の『唐詩成法』の「前半はこんなにも氣勢があるのに、後半はこんなにも卑弱なのか」という評語を挙げ、「この評語は適切ではない。(中略)前半部と後半部は矛盾していない。それぞれが引き立ててている」と述べている。⁽²⁸⁾

この一文から判断すると、『唐詩成法』では、この詩の前半は評價しているが後半は評價されていないと読み取ることができる。それに對し劉寧氏は異を唱えている。ということは、中國においても後半に對する評價は少なくとも二つは存在するということになる。

以上のことから、前半と後半についての評價を次のように二點にまとめることができる。

①前半に比べ後半を評價しないもの。

②前半と後半はそれぞれ引き立てられているとするもの。

論者のこれまでの調査した範圍においてであるが、①の「前半に比べ後半を評價しないもの」というのは日本の研究

者に多い。中國においては『唐詩成法』にのみ見られた評價である。中國においては②の「それぞれ引き立てあう」という評價が多い。前述の川合氏の評價はこの②の評價と同様と見ることが出来る。後半に關する評價を①②のどちらかに統一する必要はないが、②の「それぞれ引き立てあう」という評價は、この詩が何故孟浩然の代表作の一つと言われているのか、その理由に迫ることが可能になるものであると考える。よって、この「前半と後半の關連性」についても詳細に検討する必要がある。

七、おわりに

以上、孟浩然の「臨洞庭上張丞相」詩に關する先行研究を概観し、この詩に纏わる問題を浮き彫りにした。従來の問題——「張丞相」は「張説」か「張九齡」のどちらなのか——の他に、この詩に詠まれる言葉にも様々な問題點があることが明らかになった。

その問題とは、詩中の「坐」、「垂釣者」の言葉の理解についてである。兩者とも、日本と中國において解釋が異なることが確認できた。この他にもう一點、前半の二句と後半の二句に關する評價——前半に比べて後半は劣る——に纏わる問題は兩國に共通した問題でもあった。

これらの問題を解決することを通して、孟浩然の「臨洞庭上張丞相」詩のどこに彼の代表作と言われる所以があるのかを解明することができると考えている。論者は「坐」及び「垂釣者」に關する調査を行い、別稿にて論じる準備をしている。

注

- (1) 黒川洋一氏「孟浩然『望洞庭湖、贈張丞相』詩について」(櫻美林大學『中國文學論叢』第七號、一九七九年)に「盛唐の詩人、孟浩然の詩の今日に傳わるものは、古體、今體合わせて二百七十首餘りを數えるが、そのなかでもとくに名高いものは、五言絶句の『春曉』と五言律詩の『望洞庭湖、贈張丞相』との二つの詩である」(一四五頁)とある。また、前野直彬・石川忠久兩氏『漢詩の解釋と鑑賞事典』(旺文社、一九七九年初版、一九八〇年重版)にも、「洞庭湖畔の岳陽樓からの風光は天下の絶景とされ、古來多くの詩人が詩材にしている。この詩は、杜甫の『岳陽樓に登る』と並ぶ傑作といわれる」(九四頁)とある。
 - (2) 黒川洋一「孟浩然『望洞庭湖、贈張丞相』詩について」前掲論文、一六〇～一六一頁。
 - (3) 前野直彬・石川忠久「漢詩の解釋と鑑賞事典」前掲書、九四頁。
 - (4) 後述の清・屈復『唐詩成法』にも後半を評價しないものもある。
 - (5) 佟培基『孟浩然詩集箋注』(上海古籍出版社、二〇〇〇年)を底本とした。本文は田部井文雄『唐詩三百首詳解』上卷(大修館書店、一九八八年)による。なお、底本によると題は「岳陽樓」である。
 - (6) 田部井文雄『唐詩三百首詳解』上卷、前掲書、四十一頁。〈語釋〉參照。
 - (7) 黒川洋一「孟浩然『望洞庭湖、贈張丞相』詩について」前掲論文、一五六～一六一頁。
 - (8) 田口暢穂「孟浩然と『張丞相』」早稻田大學『中國古典研究』第二五號、一九八〇年、一一七～一一八頁。制作時期については一二四～一二六頁參照。
 - (9) 松浦友久『校注唐詩解釋辭典』(大修館書店、一九八七年初版・二〇〇〇年第四版)に、擔當者田口暢穂氏が各説を主張する研究者およびその著書(論文)を調査された。拙論では田口氏の調査に加え、論者の調査もここに記したい。(文献の棒線部分は田口氏の調査したものである。また、論者未見の文献には(未見)と記す。
- (1) 張九齡説を採るもの。
- 中國・臺灣
- ① 陳貽焮『孟浩然事跡考辨』『文史』第四輯、一九六五年・『孟浩然詩選』人民文學出版社、一九八三年(未見)
 - ② 金性堯『唐詩三百首新注』上海古籍出版社、一九八三年(未見)
 - ③ 劉逸生『唐詩鑑賞辭典』上海辭書出版社、一九八三年

④劉逸生・李小松『孟浩然韋應物詩選』遠流出版、一九八八年（原本は一九八三年に三聯書店より出版された）

⑤李華『孟浩然詩百首』中州古籍出版社、一九九〇年

⑥葛傑『王維孟浩然詩選注』上海古籍出版社、一九九四年

⑦王啓興『王維孟浩然詩歌名篇欣賞』巴蜀書社、一九九九年

參考：傅如一・姜劍雲『王維孟浩然高適岑參詩精選二〇〇首』山西古籍出版社、一九九五年頃

日本

①目加田誠『唐詩選』明治書院、一九六四年

②前野直彬『唐詩選』中、岩波書店、一九六二年第一刷・一九九七年第五四刷

③目加田誠『唐詩三百首』2、平凡社、一九七五年

④谷口明夫『孟浩然事跡考』上京應試をめぐって』『中國中世文學研究』第二一號、一九七六年（未見）

⑤黒川洋一『孟浩然』望洞庭湖、贈張丞相』詩について』前掲論文、一九七九年

⑥田口暢穂『孟浩然と』張丞相』前掲論文、一九八〇年

⑦松枝茂夫『中國名詩選』中、一九八四年第一刷・一九九六年第二九刷

⑧田部井文雄『唐詩三百首詳解』上、前掲書、一九八八年

⑨佐藤保『漢詩のイメージ』大修館書店、一九九二年

⑩莊魯迅『漢詩珠玉の五十首』大修館書店、二〇〇三年第一刷、二〇〇四年第二刷

(2) 張説説を採るもの。

中國・臺灣

①蕭繼宗『孟浩然詩説』臺灣商務印書館、一九六九年（未見）

②佟培基『孟浩然詩集箋注』上海古籍出版社、前掲書、二〇〇〇年二版

③劉寧『王維孟浩然詩選評』上海古籍出版社、二〇〇二年

④楊軍『新譯孟浩然詩集』三民書局、二〇一二年（臺灣）

日本

①鈴木修次『唐代詩人論』孟浩然的生涯』鳳出版、一九七三年（未見）

②吉川幸次郎ほか『唐詩選』筑摩書房、一九七三年（未見）。田口氏によると吉川氏は「兩説をあげたうえで張説としてい
る」とある。

(3) いずれか分からない・または並記しているもの。
日本

①高木正一『唐詩選』中國古典選、朝日新聞社、一九六五年（未見）

②前野直彬・石川忠久『漢詩の解釋と鑑賞事典』前掲書、一九七九年初版、一九八〇年重版

③川合康三『新編中國名詩選』中、岩波書店、二〇一五年

(10) 川合康三『新編中國名詩選』中、前掲書。

(11) 劉逸生『唐詩鑑賞辭典』前掲書、八三頁。

(12) 注9に挙げた各書物・論考を参照。

(13) 前野氏は、「後半の四句は、自分を官職につけてくれない天子に對する非難の心を含めるとする説、ほかの人々が釣絲を垂
れ、官職を求めていることに對する諷刺の意味があるとする説もある」と述べる。

前野氏の言及をまとめると、後半の四句には、

①官職を求める氣持ち。

②自分を官職に就けてくれない天子を非難する。

③他の人が官職を求めることへの風刺。

以上の三つの解釋があることになる。

拙論にて参照している文獻のほとんどは、①の官職を求めるといふ理解の範圍にある。他の理解としては川合氏が「あるい
は」釣りをする太公望呂尚に自分をたとえ、張丞相を周の文王にたとえて、文王が呂尚を取り立てたように推擧を求めるとも
解しうる」と、太公望呂尚の故事を踏まえた解釋を提示している。

(14) 趙桂藩『孟浩然集注』旅游教育出版社、一九九一年、二〇一頁。王啓興『王維孟浩然詩歌名篇欣賞』前掲書、五二頁。柯寶成
『孟浩然全集』崇文書局、二〇一三年、一六九頁。

(15) 劉逸生『唐詩鑑賞辭典』前掲書、八三頁。

(16) 向島成美『「坐」の訓について』、『漢詩のことば』大修館書店、一九九八年、二三一〜二四六頁。この句の訓讀は向島氏を參考

にした。

(17) 各書についての情報は注9を参照。

(18) 目加田誠『唐詩選』(明治書院、一九六四年、三三〇～三三二頁)においては、「坐」は「坐せう」と訓讀され、「つんねんと坐して」と譯している。

(19) 趙桂藩『孟浩然集注』前掲書、二〇一頁。

(20) 書き下し文は内田泉之助『玉臺新詠』上(明治書院、一九七四年、二八四頁)を参考にした。氏はこの句を「春の帯もいたずらに長すぎるありさま、そぞろに紅の顔もふけてゆくのが惜しまれる」と譯している。その他、鈴木虎雄『玉臺新詠』中(岩波書店、一九五五年初版・一九九四年、九二頁)は「徒」を「いたづら」、「坐」を「そぞろ」と訓じ、それぞれの意味も「いたづら」「そぞろに」としている。おそらくこの詩の「坐」も慣例の一つであろう。この趙桂藩氏によると「和王王簿季哲怨情」詩の「徒」と「坐」はともに「ただ」かあるいは「むなしく」と訓ずべきとなる。

(21) 江淹『遷陽亭』詩「桂枝空命折、煙氣坐自驚(桂枝空しく命を折り、煙氣坐しく自ら驚く)」「書き下し文、三枝。ここでは「空」と「坐」を同じ意味とするという理解に基づき、兩者ともに「むなしく」と訓じた。

(22) 楊軍『新譯孟浩然詩集』前掲書、一〇三頁。

(23) 劉逸生・李小松『孟浩然韋應物詩選』前掲書、四九頁。

(24) 前野直彬・石川忠久『漢詩の解釋と鑑賞事典』前掲書、九四頁。

(25) 佐藤保『漢詩のイメージ』前掲書、一八六頁。他同様に、宇野直人・江原正士『漢詩を読む②謝靈運から李白、杜甫へ』(平凡社、二〇一〇年、二一一～二二三頁)にも、後半は自分を取り上げるように「張宰相」に訴える「嘆願書」になっていると述べている。

(26) 川合康三『新編中國名詩選』中、前掲書、一一〇頁。また目加田誠『唐詩選』(前掲書、三三二頁)の「餘説」にて、「後半は、世に拙きわが身を嘆じ、丞相の推擧を求める心を婉曲に訴えて巧みである」と後半部分を評價している。

(27) 「前半何等氣勢、後半何其卑弱」清・屈復『唐詩成法』。原本は未見である。柯寶成『孟浩然全集』(前掲書、一七一頁)にも同文が引用されている。

(28) 劉寧『王維孟浩然詩選評』前掲書、一七八頁。